



繪本
共鳥壇
四



^ 13
3332
4



18
3332
門
號
卷

長者繪本黃鳥墳卷之四

遠州日阪驛 栗杖亭鬼卵著

大正十年八月廿九日
本大學出版部



梅之環ふらふらと命と落さす話
毛詩曰婦有長舌惟厲階長者が妻環う奸計よりの
源之助家出せし長者大に驚き忠太夫と召しとい
なる詎めくかき事ごとく母は忠太夫谷へく是はさ
頃より約束し姫の病氣よく平愈せば諸国遍歴の志
つり夫は受引む智ともくべしありたる人家庭みゆ
くく賤身より榮花の身となりあふくはよもや諸国へ
く志もあると存一人の了簡く更引合更後悔
と頭なるききき言へき長者も源之助が義氣と感し

一年も過ちぬ歸て来るべしと梅がえが心は磨り
 多き環へおぼろふ悦謀とめり梅がえも追失りと計
 つらきことと恐しけれ此時梅がえ兄弟へ覚悟しなげり今
 更物うくもかるく只まごさむのとのとて唐琴むかりを汝が
 媒り殿も何国よほしちるも羽あしは意し人の
 つらば慕ひと行人よめ浅間しれ女なりと人間よめと語
 つらきことと或日唐琴つものごとく筆と出くゆき
 と飛めらりつらきこと何お恐も多人母の環が寐所とて逃入
 るる梅がえの驚きつらきことしく障子押明も屏風引廻
 しつらきことにあやめくと屏風のうらと飛入るる姫もゆるり
 屏風ゆらゆら母環と大仁坊と枕とるる伏さるる姫はと

だどりね逃出人とる所大仁坊とるる飛起姫を
 こ膝より志れ汝うらと見し上助が観念せよ
 と首捻きしんとる梅がえも言やれ事の
 侍とばとせしゆりもと詫言も環もおもるげし起出く
 かく顯つ上助が言しとる一言も言しつらきこと聞
 とる大仁坊膝にゆりぬ姫も泣くも合せ母上の恩
 の死もつらきことと常に存しつらきこと他言つらきこと
 まがし悪事千里とるも外よりりも身も身も人との
 由疑ひのつらきこと源之助どの証証追ひ虎伏野
 も尋達りんとせんと誥とつらきこと今の命をたせ下
 らぬ旅路も何いしらん何国とらせつらきこと出行



一わいふと此所あり殺し多々忽父の疑いしうは二人の
 目もなき成りりんを眼の前ふゆりて夫の海と慕ひ家出す
 書の置置海跡し出行ふは二人の心もやとあり二つは疑も
 何れもどしどし此事承引もる事と涙雨のどしどし大仁坊
 もいふ由此所あり姫はころも毛と吹く疵もどしと
 姫を引立たれは環硯箱もち出夫の何れも慕ひ家出と
 一此書おれをうも猶もいふがうくわと人暮ごろまで我
 部屋と出るもゆりて暮る候待く手箱より金一はくも
 取出し是と路用より行くと假令夫も行達とるも此
 事は源之助小治とるも帰て来るも引裂捨ん心得とる
 かと能く言合め裏門より密ふ落しやり多敷大仁坊らとと

打詠めかくららひ直筆の書置とらるるも彼生と
 何れん程の心えなし一豕の是より追付と捨殺とどしと
 多しは環も打笑ひしよも心附たれ家もたこと思早と
 と追立やり其身は何れぬ身め梅がえが部屋へ行くと
 姉姫の身も見ど心地何れも命といひなぐ彼書置紙と手
 箱のうに直しおき空ちぬ身よ尋まば櫻木ハや
 先程唐琴が母上の部屋へ離れ行くと姉上やも備と
 慕ひは部屋へ入らせ多ひが唐琴も夫より見えは姉上の
 部屋屋よれと十種香めくも始りひしと思ひは
 こは不思議と其何れも尋まば手箱の上よ一通の書
 何れひしき見も仰天一扱も源之助とるの証とてい

ういし名日頃しも似ど此事わらんにもあつてもあらぬこそ恨し
 やし或の恨或のうらみもさしど環も大に驚しきまあうらこ
 一大事なり父上も忠丈夫もあつても声なり立つて
 夕も家内は騒動大くうらみ長者忠丈夫一ツ所は寄集
 いやしれ詞も出どゆつたが忠丈夫涙と拂い女中心乃
 一筋ふゆゆは慕ひ出まふつる事なりうらみも當所々
 尋つらん遠くはれつとまじり諸方へ人を出りたづみ出りは両
 親の教訓あつた思ひ留めど一時も早く人と諸方へ
 出さし心はくさし長者も女の足ふれはたてて遠く
 ゆゆと上と下とく一も扱も梅がえの夜ふすばきて館
 を出たれども何国にさうく行人も當所々れはる東國

とやう人の京のうら行つて聞ぬき此川上を行けば伏見や
 やう人へ出べしと心細き恐りと限りつけき追手やかめん
 足おほせし急ぎうら向つて雲つく如き大坊主衣の袖は
 揺らり手し梅がえ遅うら赤まゆり久しと柳乃
 蔭を出た娘を呼び伏せらびたすへおどろき
 だん家の大仁なり汝はとうし書置とかせぬまに生て
 ちんほども夜も寐がし夫ゆゑ爰お待も遠き極楽
 へ往生さんともゆぐ導師お向つてり観念せしつひ
 ちん娘もゆもあつて先もやとく大恩の母上
 のゆ何しおべき猶もはらやとめし思ひ恐しにちん
 旅路乃道芝をとり春をやり何とぞ夫おむと目達さ

命を助けとびまゝそれとも心りもくせりしりて源之助
 のふりぐり逢ひ館へ之り時よいうやうも心の中はすい
 むくと歎きかきしめども大仁坊の腰よりきせる取出したて
 くゆせつりるが何角言やうなごう我と馬耳風はごう
 聞へゆるば家役の極楽の道ちるるれば早く片付らんと
 糸より細き腰はしむとく膝より引敷は梅がえの其叶は
 ごとく悟りれば大に怒り汝出家の身して家母と密通
 刺源之助のば毒殺せん毒菜は調へてのめりて
 家と殺さんとする大悪人たる此所へ汝が手よかるとも
 一念も夫の跡と慕い本望と遂げせん容窶に顔色血
 げりてさも悲し見えたる時後の柳の木に鶯一声をた

くれば梅がえより仰き板の唐琴が家跡を慕ひて此所を
 来りてや鳥類も恩とあるふ年頃家父の恩返しに
 る人非人と帯いんとて食付くも恨と晴さんと
 りさるおとがの立ち衣の裾は口おけ懐劔抜も見
 ざらぬとて通じあて叫んでるさむいりて早く
 成佛せし又一刀くれば終は息絶々此時鶯さそ
 かりげふ敷声鳴く何国もゆく飛去りて大仁坊大に
 不審一夜陰に鳥類の鳴と聞ど何もやとやや
 立ちんとする衣の裾とく離るる執心も
 りりやと懐劔あてふつと押切淀川の深きと打込
 舌は出し立帰しと恐ろし人をもりまりりり

猿大仁坊と誘つて館と出づ

大仁坊ハ其夜長者ガリキ来テ何カメぬ貞アキ法話
して長者ガリキ伏タリ翌日梅ガエガ追手所へ出
テ川崎ノ乱杭ノ女ノ死骸ヲ見テ追入ノ者不審
立寄見シバ梅ガエ姫ガリキヤと驚キ早く長者ガリキ
テセシバ忠太夫大仰天一カ所へ馳付見トシテ
心リシ通一魚ノ色ニ替リ果タレバコハコハコハ
ゴリシ歎ケル申斐タレバ死骸ト乗物ヨリ棄テ泣
立帰タレバ長者様木ガマゲキハコハコハコハ探モ
泣キタレバ佛間直一タレバ大仁坊ハ大
敬馬ノ衣打ケテ讀経して

忠太夫ハ猶更ニ其ノ懐キニシテ姫ガレバ今
申モ傍トシテ代リ生ケル人ハ仕ヘテ香花
とリタレバ何者ノ仕業ガハ涙ノひまに衣
押ノけ貞打まり何ヤン口小く不審タリ
と取離さんと口張つて喰志先離ラシム
死骸ノ竿とぬき口とリ手小取上見シバ衣ノ切アリ
歌モ出家ノ来テ密言ヲ手ガリキ得テ心ハ悦ビ
長者ガリキ来テ密言ヲ手ガリキ得テ心ハ悦ビ
正しく出家ノ来テ密言ヲ手ガリキ得テ心ハ悦ビ
トと衣ノ口と押へて見えバ事ヲゆアリ詮
あくと叫ケル長者も是とリ上女ガリキ



傍し居るも黙頭合く居る所へ環何事なく来かり
 長者早く被ふ入る目早く見よ衣の切なり扱ハ事
 頭つきりと心へんどうとれも丸ゆね幹と娘が敵の手
 づらあもゆるやとく向べ長者何の心もつくと少一手が
 の事もゆる穴賢人ふ沙汰しうふると言たれば夫の耳よりふゆる
 忠太夫随分人にちとねやうに詮美ゆきとついで捨くわ
 部屋よかまぶ大仁坊のゆうせんとうとゆらたれば環大よ心は
 つらちちかくゆかりはしく居るふとゆ身の衣の裾と見え
 ころの初こころ見よゆきば二三寸引切り跡ゆり環仰天
 してさしはとを梅がえグロよ其切ゆりゆ今忠太夫とひそく
 物活ゆり一時も早く糸も具しと落ゆと狂氣のどくわい

大仁も抑ゆる事とて忘る居るりとて恐る
 事ゆき我住大仁村の菴乃椽の下とかの穿ち置れ
 此穴ふ住んあむ人のとらぬれ口身も糸小續く来あへと
 裏門より疎返くゆ環りるも出行くわくもまて
 忠太夫の寂前大仁和高續任のせの心もつとふりか何氣
 した体ふ呼出しの覽あぶると言たれば長者も心附あめ
 ほど大仁があさぬ女一不審のゆりもつとど早く呼来
 きて我代ふしやりるゆと我代環が部屋ふ入る尋ね
 ども大仁環もみ見えざりゆらば早速長者の前へ行て
 ぐのゆり述たれば長者眉といとめ大仁の已が心小覺ゆ
 ろん遊去つてもとくも環が見えざると不審ゆり有

夕暮に今ハ櫻木たより得む環大仁と密通して源之助夫
婦と毒殺せん〜姉君と無理の家出せし母上なりと
〜らもろく捨りしハ長者も忠夫も大い仰天してかゝる悪人
をうらめてとて家ふちをせざり〜を手にまゝ〜取逃〜ぬる
残念さ〜橋本を責めればさう〜未涙を〜ハ姉上繼母の
無理と思〜た〜死〜此事父上よち〜せま〜らあ
〜れ〜仰ら〜大仁姉上とも害〜し〜勢〜上〜ら
も縁〜り夫也姉上の遺言と背き〜あ〜せ〜ら
泣〜言〜ハ長者ハい〜梅づんが孝心を感トから自心
の者ども返殺害せ〜頬憎〜上早〜たづね出〜兩人のや
〜牛裂おせ〜躍上つ〜怒〜ハ忠夫も大い〜

か〜不道の振廻と〜天道い〜見〜むり人追付
づね出〜五摺りんと晴〜と祈〜手〜尋〜
淀与惣た五門長者が許〜来る長者横死の話
此時忠夫ハ下部ら〜引〜大仁村の庵と〜り巻残り
尋〜も人一人も〜ハ扱ハ京々奈良の〜り〜行けんと登
船渡〜場〜も落〜吟味〜た〜の
来〜い〜い〜詮方〜梅〜亡骸と納〜念〜
吊〜長者も此〜打〜不幸の事〜心〜
忠大夫と呼〜言〜家因縁〜食〜思
ざりハ河内の郡司佐〜木の子息〜橋木が物〜て知
た〜父の仇と討〜帰〜家〜町家〜智〜

源之助

のにありは姉が縁より木と彼ふ娶とてな
 家の面目なり人又此家と甥十三郎今ハ心も直りつて人
 假令家死も彼とて續せしむも泣くど涙と流せむ
 忠太夫も家君の仰はむ存い承りやふとていやだ
 正心安しと歴り多し此下不在話爰ハ近江源氏の末流
 木村と惣左エ門といふあり此人才智世ふとて淀の城主
 とすそより民と撫育し城中ハ水乏しとて水車
 とすの匠工夫し水の便り得しより世の人淀の与惣
 水車といひ習はせしよりいつし木村を淀と称へ淀と惣左
 五門源の成盛常とす先年佐々木源太左エ門川浚の公勢
 と蒙りし島田の驛あり横死ありしが其事とて絶

たりが同し仇々木の末流殊に親族の由所もたられハ鎌倉
 より淀と惣左エ門へ川浚の仰どりたりと惣左エ門早速
 請りたりが數多の金銀りしが成就しが先達
 此長者ハ金子三千兩はり受不日ハ成就ししが鎌倉殿
 も其功と稱しし金四千兩とたび多しが三千五百兩ハ長者
 おかへし残り五百兩はり窮民と救ひし諸民父母の如
 く哀しい悦々と惣左エ門公の事相濟りしがかの三千兩ハ五
 百兩と添長者がりし来りしが長者も客人の来臨殊に
 淀の城主ハさしづむに喪中なりと出向へば惣左エ門
 も今度川浚首尾能相はりも全く足下の事情あり
 此度四千兩の黄金返かまうよりよりとて三千兩ハ進

中五百兩ハ礼のつゝ持参いゝはらへれは受納下されし
 慇懃に述べしは長者も其功と称し三千兩を受納せし
 る五百兩の礼いゝ受へき系近頃不幸打落し置立
 知れぬ命を乞ふ金銀と何ふやん娘が為し其五百兩とて
 窮民と賑ふと受引給ふと惣左エ門もいふく感心し
 ちうく度く水入く窮せし民と長柄長者の施行といひて
 むと人と言ふは長者涙と流し難有はとうい此上やめ
 貴下も近く鍾倉へ赴きやふと次名残ふ一盃傾け
 項日の鬱散しと人夫より山海の珍味と出し家来近
 も餐應しと惣左エ門も大に酩酊して一兩日中かを鍾倉
 出立しとせし暫しの名残と又一盃と傾け別れはすしと帰

多此時大仁坊ハ菴の下家穴を堀り住居せればたて人
 のちと夜まゝ出ま物と買ひ里人の吐しふま長
 柄長者のめり淀と惣左エ門三千五百兩の金銀めり来り
 一ゆりゆりも満しと言捨し行過ぎね大仁坊耳とを立
 系頃日大に狼唄し長者がめり出けり一錢の貯る
 寂早一兩日の中かめりも尽まん今宵忍び入三千五百兩
 と大奪しと遠き國へ赴くと心よとつとび五更の頃長者乃
 門前ふ来し一人前後もあつて倒れ伏者ゆは是何者
 ろくバ没と惣左エ門が若黨大に酒飲過し主人の帰つても
 ちうく伏居しと大に立寄其合印めり折と奪しと
 其人とゆり起し殿とては帰つても急ぎとてとせし



繪本黄鳥埜卷之四

このわくま下し一やくとんふ馳行々大仁坊志とめし
 の羽折と着し頼冠ふ鳥返隠し案内知し裏向り
 長者居間忍び入金やあし尋ね廻せとも宵ふ忠大夫
 土蔵へ納めれば其わらわは口惜と猶たづの廻ふ行
 燈へ行りし真の闇あどらうと多此物音ふ長者眼と
 覺し枕のちらう盗賊の入りぞ出會くと呼ぶは声
 立ちしと声とまよふと組大力の悪法師なれば何の苦
 もろく取伏せれど毎刀かまはばいふやんとまはめてらうと
 させ其盤ゆは是幸と行きし上長者の頭と力ふ任せ
 く打々ま可憐長者あし叫んぐの味曾らどどて死し
 けりそれと金なれば長者紙入の重やうまはせめくは是より

とも腹いせと懐中も所此物音ふ次の間より忠大夫の坐
 鋪へ来しども真の闇ふらうと心よ曲者へのとんと障
 子と開く心得しと飛しは羽折へ忠大夫が手ふとどらう
 曲者の堀と飛越逃去たり

源之助光明山あゝ危難ふ逢詰

爰に佐木源之助の長者が館に立退敵は北国と聞ぬは
 越路の方へ赴くと東海道へしからしむる誠や秋葉
 権現の靈験はらぞしむる此度春電して款の
 在家と願ふと遠州濱松より光明山へしむるこの
 ほごの心づらふも源之助鳥目て病めし暮六ツより
 眼見え次夫ゆゑ宿も早く取ぬれば不知案内の

われが定く此行先よ宿やけしんと日ハ西山に傾くふころ
つらき味方が原より所は急ぎきりしつらき此原を
鶯の轉る声とれば思ふに立ちのりし唐琴のいふ
しや梅もえも啼や家と暮つくと見やまば此うら
源之助が側へ下りしをいなるうらげふ肩ふり袖ふたなれ
るきこころ不思義やめし野辺ふ人馴し鳥やけし
見まば唐琴うらうらうらや正しく唐琴ふもふるごと
ろのいとも行程七十里もとされ梅がえ片時も傍とるこ
ころいれ是の素心の迷ひきりんと猶も目ば付まばこの鶯
いふかきき声と出し

我死讀誦法華經

と轉るる源之助大に驚此鶯のえづるは聞ふ梅がえの
死つりと覺ゆるなり素死つり法華經と讀誦せよや
けり昔孝謙天皇の御宇大和国高間寺の兒死し
鶯とけり初陽毎朝来不相還本栖と鳴しは文字
はし見まば初もけりいふは
てそとのりののそとらんと一首の哥と轉るし例なり我と
暮る一念の唐琴お附し此とらまて来しは
不便やと涙おきまは鶯と猶もちのうらげふり
う掛りし雀のちうらづらもき飛去つる源之助の
へよ心細くも命素眼の見えざる時節ふ成るいふ
と竹杖とらつたたどく光明山の門前へ来てさうら

寺に門戸をたまたまも此門の下ふらへ雨露の凌べ
 何の佛ふゆまはくも今宵の宿はくも其邊
 ふ落散し藁打敷盲人のうまし門柱に寄りし
 みても梅がえのうらやまかき死し人常法華
 経に讀誦せし女も亦も讀誦せし教ゆるや南无
 幽冥出離生苑頓生菩提と面向し壽量品に讀誦
 しけし其夜心頃と思しきころ人声し秋葉を
 の雞所夜通の春清の成事や駕料の上は酒價と囉
 し歸きし氣散し歩行つし道なれば夜通し
 ともいふ爰まで来し是より下り坂もむいし一服
 せん火打取出し多葉松のゆせりふ落散し藁と

焼くは源之助と見えし旅人と此門前泊り
 ろつ秋葉春清の此段と下り多し和田の谷を結
 泊りのいと不知案内と見えし爰より火は
 めと念頃ふし誠し旅を道連とせし御免へと探
 しが駕昇も旅人の盲人とせし火の方へ
 と手紙しつるせれば源之助も悦彦盲人ありぬ
 ども頃日より鷄目と申し人あり夜ふ入る一向見えし
 さげらるる白紙一人の轎夫と見えし汝の先年春日江
 を食せしものや源之助何の心もつらげし知れぬ
 この哉彦もがし仕合くと食とや今ハ諸国修行ふ
 たらり何国よ近付のゆりも計らむとゆふり西人

源之助が手に取汝家ホ見忘し其郎の中看切めて
 一人の旅人金子十両ぐり持て付来り既取らんと世
 お汝がさふより淀川へり一人の大舟を肩く逃去り
 今へり甲斐多に雲助と成り世に渡り仕合たり
 其金も人其時の返礼も懐中の金も不残渡り
 と捨伏し源之助驚扱其時の人とて其もや滅ふ
 其郎かの人近付ゆ無據り今鶏目とて盲人
 同前のめなり意趣とて是ら真平免を蒙
 長きの旅路も旅用も野宿は了り体たれば
 是連もゆくと手合せり兩人嘲笑い中の上り
 してやれぬ汝が手なりの昼中く家か手合

手合ふれば鶏目とて天家ホ恨と晴させり先
 乘をかく投しとと打付るぐお打擲しとも盲人
 の源之助いんも事とて只ゆくと泣流るる
 かり一人の轎夫源之助と送るふ引提家とて淀
 川へ打込しと真送るる石壇の下へ投落しとて逃人
 ともゆれば其ゆり這廻り兩人又石壇と下り源之助と
 立先兩人返礼の濟り是より路用の金はと跡の谷底へ蹴
 けり成佛し人観念せし懐中へ手はし入金子と
 出たり其金ゆり久と取らる身ふ何ぞ金乃
 入るれと又さるお打擲し源之助今はたまりとら
 らぬがりに竹杖の刀は引抜旭丸の鈕の位徳とやゆり赫と



源之助光明
旭丸の徳



源之助

源之助光明
旭丸の徳

照しきまは不思議や技くの鳥鳴呼と啼らるる源之助
思ひ眼くらりと開きわらふ白眼と立ちまは兩人仰天と
こハ叶ハドと逃行と追うけく後袈裟お切らるる一人ハ其隙
ふ一丁程逃延り此時麓より數十の灯燈と照し来り者
りり是准らんで渡り惣左衛門鎌倉よりかへて伏葉権現
へ参詣し夜と込り出立せしむらりる悪漢ハ命大り
逃りらるる惣左衛門が駕よこしし打つらるるハ家来共声々
狼藉者夫逃らるる大勢取りま引らるる所へ源之助
抜刀めり追うけ来り同類のものらるる人同打とえと追取
巻源之助声とけ全く其者と同類らるるヤ門を盗賊にて
家路用と奪ひ取其上打擲いり由由毎據一人ハ手ふけぬ

其者逃出しの故是追追うけ参つて御免と蒙り其者ハ
給ひいと妻細述らん右往左往お立ちらるるハ棄物より暫
待と声とかけり立出る其人威風凛々人傑と見え
まきハ源之助力抜鞘ふめり尊跪とらふゆりて立出とつ
トのヤ来りも其元ハ河内の郡司依木源太左衛門の子息
源之助と名はるるやと思ひげらるる尋らふお教馬ハおも尊意のどし
夜中らるるいふじと家名はるるらるるらるる其刀抜くは
りふ時ハらるる赫として旭の出るが如し今鞘おちらるるハ
の闇夜とらるるは是依木家の重寶旭丸と推し故なり
秀ハ是下の一族らるる絶るる久しく對面せしが見忘るる久
渡り惣左衛門より賢父川浚の台命と蒙りまらるる不奉



定与惣左王



源之助

与惣左門源之助
逢ふ是よりか
なす

維新黄鳥地巻之四



横死なり其跡の仰事と蒙て事成就り恩賞と
 如恩は忝く次去ありり此度鎌倉へ内礼し
 下り其帰国の序三尺坊権現へ忝番の帰る定て復讐言
 の志し國と巡り今以敵も去りて中未前は
 察とり一言小源之助も其智は感ト仰のく父と圖討ふ
 其の上母ハ叔父なる源吾ハ殺害せしむる勢さ
 一人仇と復し叶は夫由父の仇と先め
 母の敵ハ時節と待んと存所漂泊仕る委細物語り
 与惣た工門打點き尤なり敵ハ北國と聞ぬ是は是より信州
 へ立越尋らるる叔父源吾が不道ハ泰鎌倉あり内仰
 蒙て事もたれむ父の敵と首尾能討あり必我本城へ来

討せ奉るせんと世頼し述ぐんハ源之助
 辱涙ふいせび何事もたの奉る追付父の仇と討り再會
 侍しんと勇進人ぞ立上り候や待多敵討の血祭せら
 見よとかめ一賊と引よめいこの辱しと抜も見よ次首
 打落ふいさぎより追付尋来ると別れ都へ帰り
 ちり

繪本黃鳥墳卷之四終

